

## メッセージアウトライン サムエル記第一12:1～25

### 「心を尽くして主に仕えよ」

[1-3]「サムエルは全イスラエルに言った。『見よ。あなたがたがわたしに言ったことを、私はことごとく聞き入れ、あなたがたの上に王を立てた。今、見なさい。王はあなたがたの先に立って歩んでいる。私は年をとり、髪も白くなった。そして、私の息子たちは、あなたがたとともにいる。私は若いときから今日まで、あなたがたの先に立って歩んできた。さあ今、主と主に油注がれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを虐げ、だれかを打ちたたいたかどうか。だれかの手から賄賂を受け取って自分の目をくらましたかどうか。もしそうなら、あなたがたにお返しする。』」

ここはサムエルの潔白なことの証明である。

サムエルは長年の間、イスラエルのさばきつかさ、祭司、預言者として歩んできた。特にイスラエルの王政の樹立に対して、彼は主の命によって民の求めを受け入れ、サウルに油を注ぎ、王として立てた。そして、その王を群れを飼う牧者の姿にたとえ、「民の先に立って歩んでいる」と、王政が進行し始めたことを認めている。さらに、ここで彼は自分のことについて三つのことを言っている。

①私は年をとり、髪も白くなった。→王政の始まりと、さばきつかさとしてのサムエルの引退の示唆。

②私の息子たちは、あなたがたとともにいる。→イスラエルの指導者としての不適格性。

③だれかの財産(牛、ろば)を取り、だれかを虐げ、打ちたたき、賄賂を受け取り、公正なさばきをしなかつただろうか。(不正な判決)

そしてこれらのことについて、もしそれが事実ならば、あなたがたにお返しするとまて言い切る。

[4]「彼らは言った。『あなたは私たちを虐げたことも、踏みにじったことも、人の手から何かを取ったこともありません。』」

民の答えは、否であった。

[5-7]「サムエルは彼らに言った。『あなたがたがわたしの手に何も見出さなかったことについては、今日、あなたがたの間で主が証人であり、主に油注がれた者が証人である。』そこで、ある人が『証人は』と言うと、サムエルは「主である。モーセとアロンを立てて、あなたがたの先祖をエジプトの地から上らせた方である」と民に告げた。『さあ、立ちなさい。私は、主があなたがたと、あなたがたの先祖に行われたすべての正義のみわざを、主の前であなたがたに説き明かそう。』」

「主に油注がれた者」とはこの場合サウルのこと。サムエルはここで王であるサウルと、主なる神を証人として立てている。さらにその証人としての主のみわぎの歴史性を民に思い出させる。

[8] ここは出エジプトからカナン定住までを一言で言い表している。

[9] ここはカナンの地定住後の出来事が記されている。イスラエルは主を忘れたので、主はイスラエルをハツォルの軍の長シセラの手、ペリシテ人の手、モアブの王の手に売り渡された。それで先祖たちは彼らと戦うことになった。

[10-11] イスラエルがバアルやアシュタロテなどの偶像礼拝の罪を悔い改めて主なる神に助けを叫び求めたとき、主はエルバアル(ギデオン)とバラクとエフタとサムエルを遣わして敵から救われた。これは士師たちの時代である。

[12-13]「しかし、アンモン人ナハシュがあなたがたに向かって来るのを見たとき、あなたがたの神、主があなたがたの王であるのに、『いや、王が私たちを治めるのだ』と私に言った。今、見なさい。あなたがたが求め、選んだ王だ。見なさい。主はあなたがたの上に王を置かれた」

これは1サムエル8-11章の出来事である。ここで重要なことは主なる神がイスラエルの王であるのに、彼らは人間の王を求めたという点である。主は彼らの頑なな心を見て、彼らを滅ぼすこともおできになったが、あえて彼らの上に王を置かれたのであった。これは神が根負けしたのではない。神はそのような人間の愚かさを通してみこころをなそうとされているのである。

[14-15]「もし、あなたがたが主を恐れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、主の命令に逆らわず、また、あなたがたも、あなたがたを治める王も、自分たちの神、主の後に従うなら、それでよい。しかし、もし、あなたがたが主の御声に聞き従わず、主の命令に逆らうなら、主の手が、あなたがたとあなたがたの先祖の上に下る」

ここではイスラエルの民と王が主に聞き従う場合と、従わず逆らった場合とが対比されている。従うならばそれでよい。つまり王政を進めても順調に行く。しかし、逆らうならば主の手が民と王の上に下る。すなわちさばかれるということである。

ここでの「先祖」ということばは直訳すると「王、指導者」と訳せることばで、「主の手が、あなたがたとあなたがたの王の上に下る」という意味になる。

[16-18]「今、しっかり立って、主があなたがたの目の前で行われる、この大きなみわぎを見なさい。今は小麦の刈り入れ時ではないか。主が雷と雨を下されるようにと、私は主を呼び求める。あなたがたは王を求めることで、主の目の前に犯した悪が大きかったことを認めて、心に留めなさい。』そしてサムエルは主を呼び求めた。すると、主はその日、雷と雨を下された。民はみな、主とサムエルを非常に恐れた」

「小麦の刈り入れ時」とは5月から6月頃である。イスラエルではこの時期、雨は降らず、雷もない。サムエルは民が主のみこころをそこなったしるしとして季節でもないのに雷雨が下るように主を呼び求めた。そして確かに主は彼の祈りに答えて雷と

雨を下されたのであった。これを見た民が主とサムエルを非常に恐れたのは当然の反応であり、彼らは自分たちが大いに主のみこころをそこなったことに気がつかされたのであった。

[19]「民はみなサムエルに言った。『私たちが死なないように、しもべどものために、あなたの神、主に祈ってください。私たちは、王を求めることによって、私たちのあらゆる罪の上に悪を加えてしまったからです。』」

民は自分たちのしたことは、罪の上に悪を加えたことであったと、はっきり告白した。そしてサムエルに自分たちが死なないようにとりなしの祈りを求めた。

[20-22]「サムエルは民に言った。『恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行った。しかし主に従う道から外れず、心を尽くして主に仕えなさい。役にも立たず、救い出すこともできない、空しいものを追う道へ外れてはならない。それらは、空しいものだ。主は、ご自分の大いなる御名のために、ご自分の民を捨て去りはしない。主は、あなたがたをご自分の民とすることを良しとされたからだ。』」

サムエルはイスラエルの民を突き放してしまったのではない。彼は民に「恐れてはならない」と言い、さらに「主に従う道から外れず、心を尽くして主に仕えなさい」と教え、また「役にも立たず、救い出すこともできない空しいものを追う道へ外れてはならない」と警告した。

サムエルは主に仕える祭司、預言者としてこれらのことを伝えたが、その根底には主なる神がご自分の大いなる御名のゆえにイスラエルを捨て去らず、ご自分の民として導かれることを良しとされているという事実がある。

神に逆らい、偶像礼拝や空しいものを追い求め、さらには王を求めるという悪を加えたイスラエルであったが、主は決して彼らを見限らず、神の民として導かれるのである。

[23]「『私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、主の前に罪ある者となることなど、とてもできない。私はあなたがたに、良い正しい道を教えよう』」

さばきつかさ(士師)としてサムエルは引退しても、引き続き、イスラエルのために祈りにおいて主にとりなしをし、影響力を及ぼすことを告げ、また彼らのために良い正しい道を教えることも伝える。(律法の教育) サムエルはさばきつかさとしては引退してもなお祭司、預言者としてその働きを終生続けるのである。イスラエルのために祈ることをやめることは、サムエルにとっては主の前に罪ある者となることであった。彼は主に仕える者としてこのような深い自覚を持っていた。

[24-25]「ただ主を恐れ、心を尽くして、誠実に主に仕えなさい。主がどれほど大いなることをあなたがたになさったかを、よく見なさい。あなたがたが悪を重ねるなら、あなたがたも、あなたがたの王も滅ぼし尽くされる。』」

ここでは、心を尽くして誠実に主に仕えること、イスラエルのためになしてくださった主の歴史のみわざを思い起こすことの勧めがなされ、しかし、そのような道に進

まず、悪を重ね続けるなら、民も王も滅ぼし尽くされるとの警告もなされている。

イスラエルは先祖アブラハム以来、主なる神が彼らを用い、育て、御自身の栄光を表すために選ばれた民であり、主こそ、今まで彼らを守り導き、出エジプト以来の大いなるみわざをなされてきたまことの王であるのに、民はイスラエルのために人間の王を求めるといふ大きな罪を犯した。しかし、それでも主はご自分の大いなる御名のために彼らを見捨てず、ご自分の民として導かれる。サムエルもさばきつかさを引退しても、引き続き民のために祈り続ける。

今日の箇所から教えられる神の民としての基本は

- ①心を尽くして主に仕えること。(主なる神は利用すべきお方ではなく、仕えるべきお方である)
- ②役にも立たず、救い出すこともできない空しいもの(偶像)を追わない。
- ③主がなしてくださった大いなるみわざを思いめぐらすこと。

これはイスラエルのためだけではなく、主イエス・キリストを自分の救い主として、信じ救われて主なる神を信じるすべての信仰者に当てはまることである。